



淨瑠璃と洒落本

若 月 保 治

淨瑠璃が歌舞伎劇やその他の藝術乃至文藝に對して、及ぼした影響は想像の外に大きいものであり、殊に江戸後半期の文學に於ける影響は一層目覺しいものである。さればその全影響について調べることは容易な業ではないが、試にそれが洒落本に對しての影響について見ても必ずしも輕視すべからざるものがあるやうである。

ところで淨瑠璃の中では、近松の世話物には遊女關係のものが多く上に、廣く知られた作が數ある爲か、さすがに洒落本と關係ある作が最も多く、中でも『天の網島』『冥途の飛脚』『夕霧阿波鳴渡』は屢々洒落本に利用されてゐる。その外にも『大經師昔曆』も、『長町女腹切』も『國姓爺合戦』も材料に用ひられてゐる。

近松物以外では、『男作五雁金』（寛保二）と關係ある洒落本が多く、歸橋の作『愚人贅漢居續借金』（天明二）

梅月堂堀人作『青樓五つ雁金』（天明八）、その後篇たる『染後五所紋』、梅暮里谷峨の作『甲子夜話』（享和元）、その後篇『嬌意也思』、同じ谷峨の作『契情買言告鳥』（寛政十二）などがそれである。その他外題を『太平記忠臣講釋』にもちつた『辨蒙通人講釋』や、『碁太平記白石嘶』などに關係ある十方茂内の作たる『深川手習草紙』（天明五）や、『染模様妹背門松』（明和四）のお半長右衛門を材料にした松風亭の作『風俗通』（寛政十二）や『八重鼓浪花漬萩』（寛延二）と連る振鷺亭の作『見通三世相』（寛政八）や、文耕堂の『ひらかな盛衰記』（元文四）に材を借りた一九の作『惠比良濃梅』（享和二）や、小紫權八を材料にした『驪山比翼塚』（安永八）に關係ある嬉丸の作『比翼塚』（享和元）や、海音の『等屋三勝二十五年忌』に關係ある振鷺亭の作『意妓の口』（寛政年間）などがその主なるものである。

また『假名手本忠臣藏』に縁あるものには、小金あつ

丸作『仇手本』(享和元)及びその後篇『通神蔵』(享和二)と、蘭奢亭の作『祇園祭焼燈蔵』(享和二)の三つをあげる事が出来る。

なほこの外に、洒落本の中には、時に道行の文が加へられてゐるものがあり、或は淨瑠璃風の節事の如き部分が設けてあるものもあり、或は結尾が淨瑠璃風に結んであるものが屢々見出され、歌舞伎劇と洒落本の關係にも劣らぬほど、淨瑠璃ともいへる關係が工夫されてゐるのである。

二

ところで淨瑠璃と洒落本との間にいろいろな關係が工夫されてゐるといつても、只さういつただけでは、あまりに抽象的であつて、如何にも學術的でないので、せめて私は近松物だけについて、それが如何なる風に利用されてゐるかを少しく述べて見たいと思ふ。

『天の網島』に關係のある作は三つあるが、山手山人の作『雙床満久羅』(寛政元)には、紀伊國屋小春と紙屋治兵衛の名は出て來はするが、二人の間の交渉は殆んど描かれてをらず、むしろ他の一人の客が、隣座敷の三味線歌で、いつか伊左衛門氣取りになつて、折角來た小春を夕霧抜ひにして、すねた眞似をし過ぎて逃出される滑

稽や、今一人待ばけになつてゐる客の處へは、病つてろく／＼食も與へられないで、餓鬼のやうになつた遊女が忍んで來て、食ひ残しの御馳走をつまみ食して、客を驚かす悲痛な滑稽が描き出されてゐる。つまりこの作では小春治兵衛の名も蜷川の名も借物で、實は江戸の新宿の廓情調を細叙するものが、作者の狙であつたのである。

次の『仲街艶談』(寛政十二)は戲家山人の作で、仲街といふのは江戸深川の廓をさしてゐるのであるが、これも『天の網島』と多少の關係はある。あるといつても惡くいへばその中の色々な人物の名を借りたといふに過ぎず、治兵衛が小春と謀つて、互に別れ話を作つて、客の一人太兵衛から金を巻き上げる構想になつてゐる。そしてその構想も感心しないのみか對話までが至つて拙劣なものである。

今一つの『富岡八幡鏡』(享和二)も『天の網島』を洒落本化したものであるが、治兵衛と小春の深い仲を見の孫右衛門が心配して、自ら武士になつて來て小春に出遇ひ、彼女がもし眞に治兵衛に誠心をさへかけてゐるなら、請出して添はせてやりたいと思つてゐたに、彼女は治兵衛の女房おさんの頼みで、兄に好意を見せて、治兵衛につらくあたつたので、兄は却つて、小春と治兵衛兩者の間を裂くやうにしたといふ、まるで愚劣千萬な趣向に終

つてゐるのである。

かうして『天の網島』はいろいろ題材として洒落本に利用されてゐるが、これぞといふ優れたものは一つも見出されぬ。

同じ物足らぬといつても、『天の網島』に比べると、夕霧伊左衛門を主人公とする『夕霧阿波鳴渡』は、遙かに多分の影響を洒落本の上に及ぼしてゐるといへよう。山東京傳の作である『青樓畫之世界錦の裏』（寛政三）は、有ふれた夜の廊でなくて、五つ時から七つ時、即ち今の午前八時から夕方四時頃まで、晝間の吉原の生活極めて微細に直寫したもので、時代は後一條天皇の頃、場所は攝津の神崎とされて、『阿波鳴渡』の大體の筋が取入れてある。即ち神崎にて今全盛を極めてゐる吉田屋の太夫夕霧は、通ひつめて来て、遂に勘當の身となつた藤屋伊左衛門を、引入れては面倒を見てゐる中に遺手に見つけられて大騒となり、伊左衛門は店の若者等にひどく打擲される。折柄次の間の長持に隠れてゐた藤屋の京の出店の番頭算右衛門は飛出して伊左衛門を救ひ夕霧の眞心を見抜いて取なしたが爲に、伊左衛門は勘當を許されて、夕霧は身請されることとなり、五百兩の手附を入れた錦の財布は其處に投出され、夕霧伊左の二人は親の慈悲に泣くといふ筋であるが、實際に於ては、こ

の物語は、終の方へ色彩として附加へてあるに過ぎず、晝の間の物賣や、使用人などの一舉一動などを細叙して廊情調を見せるのが作者の狙であるのである。

寛政二年ころの作らしいが、作者の不明である『意學丸吞傾城眞之心』にも、近松の『夕霧阿波鳴渡』が材料にされてゐる。この作は四部からなり、第一節は夕霧の身賣物語で、川崎のおゑんは、三年前から病める父の療養費を作るべく、思ひ切つて、父と弟との知らぬ間に家をぬけ出し、扇屋へ身を賣つて夕霧と名乗る。だが實際はおゑんが家出をした後での、十三になる弟と父親との悲歎の物語が寧ろ大部分を占めてゐる。第二節は扇屋の生活の描寫で、後半が伊左衛門が夕霧に始めて會つて同情する場。第三節は伊左衛門の戀敵阿波大盡が、散々に夕霧からふられる場、第四節は、阿波大盡が今宵を限りに強ひて夕霧を身請しようとする折柄、今は勘當の身となつてゐる伊左衛門が、久し振りに夕霧をたづねて来て阿波大盡の今宵の様子をきいて、散々に不平を鳴らすのを、夕霧は、やつとなだめた後、伊左と二人が二階から飛下りて逃亡しようすると、庭には大盡が待つてゐる。と思つてよく見ると、それは大盡ではなくて、藤屋の義父である。義父は夕霧の貞節と孝心を知つて、夕霧を請出して伊左衛門に添はせるといふ筋で、第四節に

は、近松の作の技巧が大體に取入れられてゐる。従つて戯曲的構想になつてゐるが、或は後篇でも書く積りだつたかとも思はれる筋がないでもない。

三

前の二曲よりも一層洒落本に親しみをもたれてゐるのは、『冥途の飛脚』である。この曲を題材として借りた洒落本は四つを数へることが出来、その中、

『娼妓絹飾』は、その題名を福島順基著『將基絹飾』を洒落れたもので、山東京傳作、寛政三年刊である。内容は三節にわかれ、それ／＼「義理と情の二た道には間、柴子もならぬ梅川が飛車手王手」「つかひはたして二歩残る魚屋忠兵衛は歩三びやうでもつまらぬ身の上」「金銀をつかふ客にもかまはず横にゆくは女郎の實と卵の角道」の前置がついてゐる。

第一節では、大阪新町の廓（としてはあるがその實は江戸吉原が寫してある）の近く、箕輪に遊女屋、樋屋治右衛門の寮があつて、そこに抱への遊女梅川が、病を養ふ爲に、新造梅春を連れて來てゐる。梅川は魚屋忠兵衛の身を案じ、始めて忠兵衛に會つた夜の事などを、梅春と二人でしみ／＼と話し合つてゐる。梅川は此時既に

妊娠してゐる。

第二節の大部分は遊里生活の描寫。終に近く、金にこまつて、思ひの儘に遇はれぬ忠兵衛が、忍んで梅川を訪ねて來ると、梅春が氣を利かして、不寝番を買収して、忠兵衛を下座敷へ隠しておいて、密かに梅川に遇はせ、やがて梅春は二人を逃亡させようとする。

第三節では八右衛門が梅川を連れ出さうとするのを横取りして、忠兵衛は梅川をつれて二の口村へ隠れたと思ふと、梅川の夢がさめたといふ夢物語に於ける。

要するに近松の原作に於けるが如き、封印切の山もなければ、原作新口村の情味とは何の縁もなく、只近松の原作の人物の名を借りたといふ以外には、あまりにも關係なく、作者の目的は此作の前篇ともいふべき「傾城買四十八手」につゞいて、傾城の眞心を描くにあり、廓情調を細叙することに狙があつたものと思はれる。

この作に範をとつて作りあげられたのが、京傳の門人鼻山人の作にかゝる『青樓雛の花』（文化十四年刊）と『廓宇久爲壽』（翌文化元年刊）の二つであつて、各々二節から成り、合せて所謂起承轉結を成すものである。

この『雛の花』の前節では、金に困つた忠兵衛を救はうとして、梅川は自分につきまとい八右衛門に好意を見せ、明日十五兩を受取る約束をする。第二節では、梅川

は忠兵衛を救ふ爲の十五兩欲しさに、忠兵衛との誓を破つて、茶屋中の島屋へ八右衛門を訪れる。それを見た忠兵衛は茶屋の入口で梅川と散々に打擲する。忠兵衛のこの怒を見た八右衛門は不平満々であつたが、梅川が八右衛門の疑念を晴すべく、黒髪・根元から切つて心中を見せると、八右衛門は心解けて、十五兩の金を梅川にわたす。八右衛門が歸つた後で、忠兵衛は梅川を訪れて、彼女の入髪を引ぬいて、散々に毒づいて歸つてゆく。——これからあとは後篇へゆづられてゐる。

後篇たる『廓宇久爲壽』に於ては、梅川の心盡しを解せずして、彼女を苦しめて歸つた忠兵衛は、翌日、前の茶屋亀屋から舞鶴屋へ行つて、太夫舞鶴を招いて語り會つてゐる中に、忠兵衛と梅川との間柄を知らぬでもない舞鶴も、遂に忠兵衛と深く云ひ交はすことになる。忠兵衛は居續をしてゐる中に、十兩の支拂に困つて、亀屋にて思案投首の折柄、梅川と忠兵衛との間を元の鞘に収めようと苦心して、梅川の新造梅春を訪れて来る。渡りに舟と、圖々しい忠兵衛は梅春に向つて、十兩の工面を梅川に頼んで貰ふ。梅春は喜んで歸つて、梅川にその支拂ひを引受けさせる。相方の誤解も解けて、話は圓く收まつたと思つて見ると、それは凡て梅春をつれて、梅川が箕輪の別荘に行つて、病氣保養中の夢であつたといふの

である。そして最後に、「或夜月なきを幸ひ、此別荘を忍び出で、二の口村までの道行は院本にゆづる……」とある。全く京傳の作の焼直しから一步も出てゐないことがまさ／＼と何人にも肯かれるであらう。

最後にあぐべき梅忠ともおさ／＼茂兵衛とも更に『女腹切』とも關係のある

『一日醉^{まよ}忌^い輝』は、萬象亭の作、天明四年の刊にて、題銘の上に割書にして「梅川忠兵衛、おさん茂兵衛」と記され、天明四年江戸森田座で、春狂言の二の替りに、上方下りの三掛徳次郎が、松本幸四郎と夕霧伊左衛門を演じ、更に梅川忠兵衛、おさん茂兵衛を二日替りに、富本齋^{いづみ}宮太夫の淨瑠璃で演じて好評を博した。即ち近松物である『冥途^{みよと}脚』と『大經師昔曆』の主人公達を借りて、天明元年の『三都假名話』の例にならつて、芝居の際物を題材にしたもので、最初に、芝居の脚本といふよりは、所謂臺帳の一部をかりて

本舞臺かざり附、二の口村在所の道具幸四郎、三掛徳次郎皆様御存じのごとく齋宮太夫^{いづみ}淨るりにて所作あり

上るりへたがひに親ともわが子ともいはずいはれぬ世のぎり
は涙わきづるみなかみと身もうくばかりになきかこつ……

などと記し、森田座の芝居が終る間際の様子から書出し

客であつた亀屋の忠兵衛が、船頭茂兵衛をつれて、深川土橋に遊ぶまでの船の中の様子までが先づ描かれてゐる。ついで吉澤屋へあがつてから、おかみのお玉、忠兵衛茂兵衛、家の者等の雑談の中に、大阪トリの藝者お三、梅川等が来る。お三は遂に茂兵衛を口説落す。同じ船頭奴の藤兵衛は、二兩の金の催促に來て茂兵衛を苦しめる近松の『長町女腹切』の刀屋半七とお花とがそこへ出て來て、お三茂兵衛の二人を救ふ。一方では金にこまつた忠兵衛を助けようとして、梅川は指を切つて八右衛門になびかうとする。

忠兵衛の養母妙閑は手代の長藏を八右衛門に化けさせて、梅川の心をためさせてゐたが、眞に忠兵衛に對して實意があること疑ないとわかると、梅川をお諏訪と改名させて忠兵衛と添はせることにする。かくて二組のおめでたがまとまるといふのだが、終りが「しやん／＼しやんと納まる二々女夫二目替りの評判を遠からんものはとり／＼噂の音にも聞け、近きはよつて見物あれと、最負の臂をはるの日のお笑種と筆を納めぬ」ととめたりしてある處を見ると、四世幸四郎一座の爲に書いたのではないかといふ疑も起るのも尤ものである。殊にその序文には「見かけは洒落本世界は狂言、鳴聲は鸚鵡石に似たりける、鵲のやうなる化鳥な書き物鴛鴦のつよくわるひ

所は木曳^{つぐみ}の目引袖引笑つておくれ／＼」とあるに見ても、又作中に狂言關係の言葉が少からず出てくるに見ても、芝居味たつぷりな作『田舎芝居』の作者の作だけであつて、芝居に縁をもたせつゝ、見物を引かうとした魂膽と見られるが、矢張り原作近松物の人物はたゞほんの少しに使はれてゐるのみで、其實靡情調を描き、梅川忠兵衛よりも、むしろお三茂兵衛二人の人情味を書いたものである。

四

以上によつて見ても大體知られる如く、淨瑠璃が洒落本に影響し、その題材が一種の題材として洒落本に取入れられてゐることは少くないのであるが、洒落本そのものの構想を戲曲的構想にかへでもしない限り、多くは原作の人物の名を借りた以上に殆んど原作が利用されてゐないのが常である。よし又多少の筋が借られても、それは部分的であり、むしろ原作を汚すこと屢々であり、原作の文章を借りた場合でもこれぞといふ効果をあげたものは殆んど見られないやうである。その中近松の最も名曲でありながら、皮肉にも最も下手に取扱はれてゐるのは『天の網島』であるのは、『天の網島』が原作から直接に影響を及ぼしたのでなくて、一旦『天の網島時雨炬

『燐』の如き劣悪唾棄すべきものに改作されて、それから再び構想をかりたが爲でもあるのである。之に反して夕霧曲や梅忠曲のやうな、改作の割合に劣悪でないものは洒落本化されても、それほど拙劣な構想にも墮してゐないやうである。何にしても、洒落本の本来の目的は、物語り筋とか、構想脚色に重きを置くといふよりも、廓情調を微細に描寫し、廓生活を直寫するといふことにあつたのであつて、淨瑠璃の構想脚色をかり、それを題材とするといふことは、むしろ人氣を引かん爲の附たりであり、だしであるのである。そして洒落本が次第に變遷して、次に來る所の人情本的傾向を帯びるにつれて、淨瑠璃が漸く洒落本に利用されることは愈々多くなり、それが利用されること多くなるにつれて、洒落本の世界が人情本の域に展開し、遂に洒落本は禁止されて其跡を絶つに至るのであるが、例へば『廓宇久爲壽』の如きを見ても、忠兵衛と舞鶴との纏綿たる情緒を描いたあたりは、最早洒落本ではなくして、明かに人情本だといつてゐるのである。而もそれを洒落本に數へようとする傾向のあるは、單にその書冊が洒落本風の小形であるといふ形式にのみかゝつてゐるのである。

要するに淨瑠璃の内容及び、その中の人物は一般大衆の間に普遍化してゐるが爲に、洒落本もその最初の目的

が行きつまつて來ると、淨瑠璃の構想や人物を利用することによつて、商品價値を増さうとすることに苦心し、それは洒落本の末期に及んで一層廣く行はれたのであつたが、何分にも洒落本の作者に、淨瑠璃ほどの作者がなかつた爲に、十分に之を利用して、藝術價値を收め得るに至らず、又洒落本の本来の目的が特殊な生活の單なる直寫とか氣分描寫とにおかれてゐたが爲に、兩者の祖ひに相當の距離があり、花々しい成功を見るに至らなかつたものと思はれるのである。近松以外の淨瑠璃に關しては他日を期することにした。

若月保治 著

人形淨瑠璃史研究

A5判特製一二六〇頁
價一八・〇〇 郵七五

東京市小石川區大塚町

櫻井書店

振替東京一六九〇九五